

445 商科見学旅行

〔法学新報〕第27卷2(305)号 大正6年2月1日

○商科見学旅行 大正五年十一月四日[○]帝都に立太子式の行はれたる翌日我中央大学商科学生は商業視察旅行を挙行せり筆を荷ひ雲煙山河の中に身を埋めむとする文士の格にてもあらず景に動き色に憧れ五尺の微軀^(ミヅ)を軀^(ミ)て名所古跡を尋ぬる格にても尚更なし目的は視察の爲め、行く先は桐生足利足尾日光、群は商科の健男児一行二十九名内に講師太田哲三氏並に教務課大松氏も参加せられ同日午前七時浅草駅に集合して八時出發す南千住、粕壁を過ぎ汽車は田疇の間を馳す朝は日により復活し村林人家等あらゆる万象は晃晃たる光を浴ひて一顧眴毎に変わり来る景色は無量の詩興を催し朝餉たく煙のむらむらと昇り行く等は坐る歌心なき吾身の上を啣たしむる種なり是等の風景を眺めつつ快談に時を移せは輻輳の響麟麟と利根の末流なる鉄橋を渡り足利駅に十時三十分到着せり市内工場並に市場を參觀すべく直に出発す日は暖く風なけれ共更に一気のありて髻髪を揺し灑色天に流れ秋の意は今正に浩蕩たり左に浅間か丘を眺め渡良瀬川の長橋を渡りて市街に入り直に織物同業組合所の關田嘉七郎氏を訪

ふ氏の好意に依り案内を得て視察することを得たり次に其概況を挙げん抑々当地の織物同業組合なるものは輸出絹織物製造業、同木綿織物製造業、織物買次商、綿糸商、染色業、整理業、仲立業の十業者を以て組織せらる而して組合其ものの業務は工場、事務、検査の三業にして工場とは機械据付等に関する顧問となり事務は是等工場に関する事項を取扱ひ検査とは検査所を置きて粗製濫造不正手段等製織上に於ける弊害を防止するなり検査せんとする織物は或一商人の手により集められ検査所にて尺巾の規定違等を検査す織物市場は毎月五、十の日を以て開かれ織物買次商は各地より集来の顧客を伴ひ若くは通信を以てせられたる注文を齎らして市場内なる自家の店舗に出張し東西より出市せる機屋に会し其携帯せる見本に就き商談を開くなり次に工場は其始め僅少なりしかとも漸次其利を知り又農家の副業として行ひつつありしものか合同して一工場を組織する傾向となれり現今にては工場の数多くなり毎年五六台つつの機械据付を見る程の盛況となり染料の大部分は輸入品を使用せり是等工場は町を中心として附近に存在す尚ほ組合は売買に関しては干渉せぬとの事なり以上の観察を為し更に工場内部を參觀せんと為せしか其他地方人に參觀せしむるを好まぬ様なれば規模の大小機械の相異あれとも得る所は同じものとの説にて県立工業学校へ向へり校内に据付あるものは艶出機械、乾燥機、縦横機、染色用器等なり遺憾ながら午後より運転実習との事にて唯大体の説明を聞きて校を辞し鍍阿寺へと向へり当寺は往古足利の別業と称せられ七百十余年前の建築物にて内に大日如来を安

置すと今日にては保護建築物なり再ひ以前の道に返へり有名な足利学校を訪ふ本校は淳和天皇の朝天長九年小野篁の創立する所と云ふ中に孔子並に篁の像を祭る側に遺跡図書館あり茲に足利文庫所蔵の古文書を収む我等一行は是等古文書を観覽し側なる閲覧室にて約一時間余休憩し午後二時〇五分足利駅発にて桐生へと向へり四十五分にて桐生駅に到着し駅前の茶屋にて昼飯を喫し直に当地工業学校を參觀すべく出発せり然れども余は今夕足尾へ出発すへき旨同行隊よりの命令にて一時間許一行の宿泊する桐生館にて休息し六時三十七分桐生発の列車にて同級森谷君同伴にて足尾へと向へり汽車は一条の黒煙と共に二人の先発者を乗せて停車場を揺き出でぬ車内の談笑車外の秋色は言ふも更なり然れども遺憾ながら日は西山に没し僅に十三夜の月光を受けて眼前数十間を明視するのみ四方の連山は薄墨を引ける如く前後して立塞かる忽ち眼前豁然として開き来るものは何の景そ仰けは奇巖突兀として或は立ち或は偃し鬼神の舞ふにさも似たり其奇殆ど名状すへからす俯して清流を臨めは銀線を引きたる流は巨岩に当りて相受けず激射翻闘し白を噴きて去る列車は益々其勾配を強めて神土駅に至れば突に海拔一千九十七尺の高きに有ることを知る寒気甚し稍々倦怠を覚ゆる頃間藤駅に到着す時正に九時三十分直ちに暢和館を訪ふ漸次休息後我校友業生にして足尾銅山へ勤務せらるる山下貞男氏を訪問すへく里余の道を腕車を駆り深夜に訪ひ万事翌日の打合せを為し再び帰館入浴後寝に就けり」五日。臉を擦りつつ不充分なる眠より醒めたるは夜と黎明の短き瞬間なり未だ四囲の峰峰も濃紫色の暁の

帷の中に黙想せり之に反して道路は行交ふ坑夫の声にて喧し午
 前七時五十九分一行足尾駅著の預定なれば直に間藤駅に行き電
 話にて当駅に乘越すへき旨を報して今や到着を待受たり八時
 を過くること二十五分黒煙を噴きつつ猛進し來れるは是れ一行
 の乗れる列車なり昨日の疲労も打忘れ今日更に新智識を得んと
 の希望に満ち満ちたり一先つ暢和館へと案内して後山下氏より
 聞取りし事項を精細に報告し漸時休息す而して後二時間余に亘
 り足尾銅山の見学を行ひたり足尾銅山とは赤倉、通洞、小滝の
 三か所の総称なり然れとも何れも其事業に於ては唯規模の大小
 あるのみなれば一行は赤倉を參觀せり古河の長橋を渡れば鉾山
 事務所の入口に至る案内人を請ひ電車軌道に沿ひ坂道を昇れば
 有木坑口に達す鉾坑は豎坑にして深さ千尺以上なり入坑するこ
 と不可能なれば選鉾所に進まんとせる時突然頭上に金の鳴る音
 を聞く振返へれば坑口上数間の所にて今正に「ダイナマイト」
 の爆発せんとする相図なり数分にして美事なる爆発あり岩石数
 間四方に散乱せるを目撃す選鉾所に至れば女工の水にて比重の
 軽重を知りて選出するを見る次に是等の鉾石の細粉を高所より
 水流にて低所に送りつつ鉾石を選出する工場に至り又粉鉾を
 「テレビン」油にて分析する所へと進めり此所を出場して再び
 曲折せる坂路を昇れば四大白堊の煙突の黄色を吐きつつあるを
 見る是れ精練所より出て來る亜硫酸瓦斯にして之か為め附近の
 峰峰は樹木一として無し稍々下方に鉄索動力工場あり更に降れ
 は製練所あり其壯大なること実に驚嘆の外なく赤熱せる銅の滝
 の如く流るる中を職工の立働く様はさなから地獄の火の山もか

くあらんかと思はしめたり又一方鉾石鑄解の際發生する瓦斯は
 煙道中に入り曲折しつつ其内に含有せる銅粉を沈殿せしめ其沈
 澱物を再び鑄解して銅を得る方法を講するなり以上の見学を行
 ひ一旦宿所に戻り午後一時半中宮祠へと出発せり幾程なく行く
 中に路は漸く險阻となり始めか内は峻坂を登り巖角を攀つるこ
 とも何の苦もなく元氣旺盛踴躍談笑して進む然れとも進むにつ
 れて益々峻坂となり遂に崎嶇蜿蜒たる羊腸となり談笑の声も喘
 喘たる氣息と化す途の茶屋に小憩し茶を喫して苦痛を医し再び
 発すれば傾斜益々急にして迂曲盤折加ふるに岩石磊砢頗る登攀
 に苦しむ時に潺湲たる溪流を涉り或は流れと別れて峻坂のみに
 攀ち遂に午後四時四十五分足尾峠の頂に達す前面を望めば中禪
 寺湖は男体其他の山に抱擁せられ頭を廻らせは足尾の連峰は
 碧く薄く悠然として大空に青海の波を打てるか如し斯くして峻
 坂を降ること八丁にて湖辺の渡舟場に著せり休憩すること暫時
 天地冥く早や湖上は鉛色に包まる月は東天に高く其影を湖水に
 ひたし藍衣を着けたる男体山は湖に其雄影を沈め玉を溶かした
 るか如き水面は僅かに細紋をなすのみなり遂に舟上の人となり
 七時半頃泉屋に投宿す入浴後夕食を喫し一室に集合し茶話を
 催す学校並に太田講師より寄贈の菓子に舌鼓を打つ余興として
 は詩吟あり浪花節あり琵琶歌あり踊講談ありて一行昼の疲労を
 忘れ夜の更くるを知らず漸く十時に至りて終り鼾声のなかに夢
 路を辿りぬ」六日一日は自由行動の許可を得朝飯に食堂に入れ
 は山里に似合しからぬ香のあるこそあやしとて皿をのそけは赤
 腹魚の料理思はざる珍味に鱈腹かき込み宿を出つ小暗き杉の繁

りたる路を抜け華巖瀑を右に眺めつつ一折すれば新道に出つ然れとも里程並に時間の経済上旧道を探れり峻坂細坡前人後人魚申して降る踏む所樹根坎坳凸凹其歩み難きこと限りなし馬返に著せしは十一時電車にて精銅所に到りて參觀す先づ電気分銅室に入れは一槽横二間幅一間より成る槽其数幾十槽となく二列にならへるを見る内に硫酸銅液あり足尾より来る銅塊並に銅板を釣す次に銅を溶解し海鼠形に造る所並に「ロール」により熱せる銅を板となす仕事等順次に見学す唯残念なるは本日より午後二時ならされは針金工場の製造状態を目する能はざることなり此所を辞して午後一時日光廟に至り輪王寺門跡、東照宮、陽明門、唐門、本殿、奥の院の結構を見物して其美に驚く而して五時三十分手に手に夕の弁当を持ち日光駅を離れて帰京の途に就けり右窓に眼を上くれば日の余光を受け模糊の内に昨日の友たる足尾の連山は薄き霧に包まれて隠見し一行と別れを惜しむにさも似たりさらは足尾の山よ我等は別れんとして汝に謝す精神の修養に將た理学史学と諸科学に多大の智識を我に与へたるは汝等その他日再ひ吾等の汝等を眺むるとき思ひ出での種となれ汝等再ひ楽しき今日を語らんいささらは宇都宮に著せるときは日は暮れ果てて秋気ひたひたと襲ひ来る車は星の下を走りて九時二十分上野駅に著す斯くして広場にて我校の万歳を三唱し目出度く見学旅行を終へ各自家苞重もけに家路に就きぬ終りに臨み今般我等一行に多大の便宜を与へられたる山下貞男氏、關田嘉七郎氏並に岡田重五郎氏に対し深く感謝の辞を呈して此稿を結ふ（片山生投）